資料3

国立市公民館への調査・視察

1　趣旨・目的

障害者の生涯学習をはじめとして、誰でもいつでも自由に学び、出会い、交流できる取組を長年継続してきた国立市公民館への視察を実施して、共に生きる地域社会を育む上での社会教育施設の役割について学ぶことにより、本道における障害者の生涯学習を推進していく上での方策の拡充に資するため。

2　調査・視察概要

(1) 調査・視察日時

令和５年６月 10 日（土）

(2) 調査・視察先

国立市公民館（東京都）

(3) 調査・視察者

父親ネットワーク北海道	事務局長	吉　岡　亜希子
いっしょにね！文化祭実行委員会	事務局長	杉　澤　洋　輝
医療法人稲生会みらいつくり大学校	教務主任	宮　田　直　子
北海道教育庁生涯学習推進局社会教育課	主　　査	川　崎　真　也
	主　　事	齋　藤　佑　成

3　調査・視察報告

(1) 国立市公民館の概要

・市民の「集会施設が欲しい」との声を受けて、昭和 30 年に開館
・昭和 54 年改築に際しては、市民が参加する改築委員会を設置するなど、地域住民の声を取り入れた施設づくりを推進
・公民館保育室の取組は全国的に有名。また、青年室が現在も残っている点も特徴的
・国立市では、人権や平和に関する施策に力を入れてきた背景があって、障害者の生涯学習にも力が入れられてきた（社会参加に制約のある人、孤立しがちな人に対する学び）

(2) 国立市公民館の３つの機能

①公民館主催でさまざまな講座やイベントを行う場
②市民のサークル活動や学びを支える場
③誰でも気軽に立ち寄れる憩いの場

(3) 国立市公民館の５つのテーマと主な催し

①現代社会の課題(平和、人権、環境、憲法、教育、多文化共生、震災後社会　等)
②共に生きる地域社会を育む(生活のための日本語講座、しょうがいしゃ青年教室　等)
③まちを知る　地域から学ぶ（社会教育学習会、地域史、公民館利用者交流会　等）
④社会をみつめる文化を作る（図書館のつどい、映画館とシネマトーク　等）
⑤表現と創作を楽しむ（市民文化祭、身体表現、介護短歌、銅版画等）

（上記の事業名は、平成 27 年度のもの）

(4) 「コーヒーハウス」の取組…勤労青年の活動をベースに、障害のある青年が加わり、活動形態は移り変わってきた

①しょうがいしゃ青年教室（昭和 55 年開設）

・月一回、土日を中心に活動。６つのコースに分かれて活動を展開するのが特徴（スポーツ、クラフト、料理、喫茶実習、リトミック、ＹＹＷ（やりたいことを企画し、実行する講座））

・企画・運営は公民館職員に加えて、ボランティアによって行われている

・障害の有無にかかわらず、様々な人が様々な入り口から関わることができている

②喫茶コーナー「わいがや」（昭和 56 年オープン）

・市民グループ「障害をこえてともに自立する会」が運営

・営業スタッフは約 10 名。「しょうがいしゃ青年教室」のメンバーも加わる

・障害者にとっても青年にとっても、自由に集まることのできる“拠点”は重要

・公民館は、いろんな人が交錯する場所。何もしなければ、利用者は偏る

・食べることは、人と人とをつなぐツールになり得る

４　考察

(1) 父親ネットワーク北海道　事務局長　吉　岡　亜希子　氏

駅から徒歩圏にある公民館に「青年室」が常設されている。無料で集うことができる明確な居場所があることで、「しょうがいしゃ青年教室」の講座や自主企画が生まれ、長く継続できたのではないか。また、学ぶ対象として位置づいてこなかった乳幼児の子育てをしている母親たちの「学びたい」という思いを受け、昭和 46 年に「公民館保育室」が全国に先駆けて誕生している。国立市公民館は、誰もが学べる施設であるが、一方では、障害者や学びから排除されていた乳幼児の母親など、配慮が必要な学習者には学習拠点となる場を優先的に整備している。これが公平で正義にかなうことであると、市民に了解されている点も見逃してはならないだろう。

(2) いっしょにね！文化祭実行委員会　事務局長　杉　澤　洋　輝　氏

戦後の青年学級を地域や市民が支えてきた歴史的背景、文教エリアを核としたまちづくりの視点、学びに関わらず地域の互助組織としての公民館機能など、改めて地域に根差した公民館活動を知ることができた。すなわち公民館とは、そもそもが「誰一人取り残さない」の理念に基づいている。可能な限り多様なメニューを自主事業として実施し、そのことが地域住民の信頼を獲得するに至り、社会教育のあらたな担い手を創出していく。公民館だけで完結するものではなく、子どもや若者、障害のある人など、地域の多様なプレイヤーが参加できる枠組み、巻き込みながら地域のハブ機能を果たし、他と他を連携させる機能が重要であると感じた。

(3) 医療法人稲生会みらいつくり大学校　教務主任　宮　田　直　子　氏

国立市公民館では、障害当事者が中心となる活動があることで、職員やボランティアスタッフと共に作っていく過程を楽しんだり、活発なコミュニティが生まれたり、当事者が利用しやすさを感じる場となっていた。また、一年では見えない継続した関わりや取組が、職員やスタッフ、当事者の葛藤に好転的な変化をもたらしていた。当事者と向き合い変化していける学びの場に、安心して集える憩いの場という役割も備わっていた。社会教育施設には、目的が無くても様々な人が安心して集える場の提供も役割の一つだと感じた。